



京大広報

No. 714

2015.9



吉村瑤子さんがロレアル・ユネスコ女性科学者日本奨励賞を受賞(写真：日本ロレアル提供)
—関連記事 本文4499ページ—

目次

〈巻頭言〉

35年振りの京都
総務・労務・人事担当理事 清木 孝悦…4490

〈大学の動き〉

京都大学基金「感謝の集い」を開催…4492
京都市と国際学術都市としての魅力向上に関する連携協定を締結…4493
第2回京都大学一稲盛財団合同京都賞シンポジウムを開催…4493
「京都大学オープンキャンパス2015」を開催…4494

〈部局の動き〉

研究連携基盤の銘板を上掲…4495

〈寸言〉

「学問の自由」「大学の自治」の橋頭堡
上野 千鶴子…4496

〈随想〉

科学研究基盤成立の歴史を振り返って、今考えること
名誉教授 本田 孔士…4497

〈洛書〉

生物学の研究材料 小山 時隆…4498

〈話題〉

第19回リカレント教育講座「『心の教育』を考える—いじめへの対応と心のケア—」を開催

……………4499

吉村瑤子さんがロレアル・ユネスコ女性科学者
日本奨励賞を受賞……………4499

日本学術振興会研究拠点形成事業「インドシナ
地域における地球環境学連携拠点の形成」
第3回国際シンポジウムを開催……………4500

生存圏研究所のMUリーダーがIEEEマイルス
トーンに認定……………4500

大学生研究フォーラム2015を開催……………4501

人間の安全保障開発連携教育ユニットがサマー
スクール「2015年京都研修プログラム」を実施
……………4502

平成27年度総長杯(卓球大会)を開催……………4502

琵琶湖周航の歌開示の日記念講演会を開催……………4503

北部構内で「子ども見学デー」を開催……………4503

〈計報〉……………4504

京都大学企画・情報部広報課

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

巻頭言

35年振りの京都

総務・労務・人事担当理事 せい き たかよし 清木 孝悦

昨年10月に京都大学理事に就任しました。1980年に京都大学法学部を卒業し、当時の文部省に入省して以来なので、ほぼ35年振りの京都での生活です。京都の町は、他の大都市に比べ、昔とそんなに変わっていない印象です。これは、神社や寺などの古い建物が多数残り続けていることや、建物の高さ制限があり、東京のように古い建物が取り壊された後に突然超高層ビルが出現することがないからではないかと思います。したがって、京都の町を歩いていて、学生時代と変わらぬ風景に出くわし、当時の懐かしい思い出がよみがえってくることもしばしばあります。

京都大学の風景

その中で、京都大学の風景は随分変わったと思います。まず全般的に大変きれいになりました。時計台もその前のクスノキ広場も、昔はこんなに整然とはしておらず、立て看板が雑然と並べられていて、キャンパス全体が薄汚れた印象でした。当時は、大学は小ざれいであってはずらず、雑然、混然とした中からこそ新たな学問や文化が生み出されてくるという意識もあったのでしょうか。それからすると、今の学生はこんなこざっぱりとした環境で落ち着いて学問ができるのだろうか、などと余計な心配をしていますが、美しいキャンパスで学ぶ方が快適であることは言うまでもありません。

京都大学の学生

こざっぱりと言えば、今の京都大学の学生は昔に比べ垢抜けた感じがします。当時は、京都大学の学生は同志社大学の学生などと比べ、総じて野暮ったく、



「京大ルック」などと蔑まれたものですが、今は劣らずさわやかな印象で、これが本当に京大生なのかと思ってしまう。

外見だけでなく、勉強も以前よりずっと熱心なよう

です。試験さえ受ければよかった当時の法学部の単位取得の仕組みも、今は履修登録制度があり、さらにGPAの導入も検討されており、普段授業に出ていなくとも学年末の試験の際に高得点を取れそうな科目を受ければよい、という安易な対応は許されなくなっています。したがって、吉田キャンパスで通りがかりに眺めた教室の授業は学生で満員が多く、4月に新学期が始まってしばらくしても、キャンパスを往来する学生数は減りません。「与えられた講義を受動的に聴くだけでは大学の学問とは言えない」などの厳しい声もあるかも知れませんが、まずは授業に出て先生の話に耳を傾けるというのが勉強の基本であることはもちろんです。

カヌー部の思い出

学生時代にカヌー部という体育会系の部活動に参加していたので、合宿や練習をしていた瀬田川を35年振りに訪問してみました。瀬田川東岸のJR東海道線北側に部の艇庫があり、私の卒業後に建て替えられていますが、琵琶湖、瀬田川、唐橋などの風景は基本的に当時と変わっておらず、現地にたたずんで懐かしさがこみ上げてきました。艇、パドル(櫂)、ウェアなどあらゆる道具・器具が進化しているのに目を見張る中、ふと片隅にほこりをかぶって放置

されている当時の艇を見つけ、懐かしがっていると、現役部員は申し訳なさそうに「もう乗艇することはないので、いずればらばらにして処分します」と言うのでした。京都大学カヌー部は現在、現役部員40人以上の隆盛を極めていますが、部員の人達と食事をしながら話してみると、おおらかで親しみやすいという当時のカヌー部の雰囲気は継承されており、うれしく感じました。

京都大学の伝統

35年という年月はやはり長く、この空白を埋めるのには時間がかかります。しかし、久し振りに京都大学に来て感じたのは、見た目は変化していても、よき伝統が脈々と受け継がれているということです。京都大学の伝統である「自由の学風」は、「対話を根幹」としたものであり、自分の主張をするだけでなく、異なる意見にも耳を傾け尊重するという、寛容の精神に根差したものです。最近、自分の考えが一方的に正しく、異なる意見を切り捨てるような風潮が憂慮されますが、このような時代にこそ京都大学の精神には存在意義があると思います。

澤柳事件、瀧川事件(京大事件)という大学自治のためのたたかい、京都学派の脈々たる系譜、多くのノーベル賞受賞者等の輩出などの京都大学の誇るべ

き実績と、おおらかな気風とがどう結びつくのか、不思議な気もしますが、この気風と人文科学、社会科学、自然科学の幅広い学問の裾野、そして東京でも大阪でもない「千年の都」京都にあることがこれらを醸成する源といえるのではないかと思います。

これまで文部省、文部科学省で長年仕事をし、大学や学術行政にもしばしば携わってきましたが、大学の教育や研究は、教員や研究者の自由な発想を基盤とするものであり、行政は最大限それを尊重すべきということを肝に銘じて臨んできたつもりです。

ところが、最近は、やたらとグローバル、イノベーションが唱えられ、短期で成果を出すことや「すぐ役に立つ人材」の養成が求められる一方、幅広い学問を継承し、発展させるという大学の役割は軽視されているような気がします。時代の変化に機敏に対応することは必要であり、また、多くの公費が投入される国立大学が社会の要請に応えなければならないのはもちろんですが、それが大学の自主的判断を超えて行われるようになると、大学の本質、大学の良さを壊すことにならないかと危惧を抱きます。京都大学には、世の中の動きに敏感でありつつ、しかしそれに振り回されることなく、自ら正しいと考えた途をこれからも堂々と歩んでほしいと切に願います。



時計台(昭和52年)



時計台(平成27年)

大学の動き

京都大学基金「感謝の集い」を開催

夏本番を迎え熱い日差しが降り注ぐ中、7月27日(月)に京都大学基金「感謝の集い」を開催した。感謝の集いは、日頃、本学をご支援いただいている方々に直接謝意をお伝えし、貴重なご意見を伺う場である。

昨年に引き続き、第一部の大学施設見学に加えて、山極壽一 総長の就任後、初めての感謝の集いであるため、第二部は総長の講演会を開催した。施設見学に70名、講演会に81名の参加があった。

大学施設見学は、AとBの2コースを用意し、Aコースは「幕末維新の跡をたずねて」と題して「尊攘堂」と「附属図書館」を見学した。吉田松陰や勤王志士の遺墨類を納めるために建てられ、現在は大学構内で発掘された文化財の展示室となっている尊攘堂では、伊藤淳史 文化財総合研究センター助教の案内で由来とともに、縄文時代から近世までの貴重な文化財を観覧した。附属図書館では赤澤久弥 情報サービス課課長補佐が解説を行い、生前の松陰に一番似ていると言われる吉田松陰像を品川弥二郎像と並べて特別公開したほか、維新特別資料の数点を京都大学電子図書館の画像で披露した。

「静謐なる学問探究の場をたずねて」と題したBコースは、「湯川記念館」と「東アジア人文情報学研究センター」を見学した。湯川秀樹教授のノーベル



東アジア人文情報学研究センターの
吹き抜け構造の書庫にて

物理学賞受賞を記念して建てられた湯川記念館では、重森正樹 白眉センター特定准教授、花田政範 同特定准教授の解説で、湯川教授の研究室を再現した部屋や貴重資料を見物した。中国学研究の国際拠点である東アジア人文情報学研究センターでは、随所に工夫を凝らした館内を富谷至 センター長、クリスティアン・ウィッテルン 同教授の案内で巡った。

第二部は百周年時計台記念館1階の百周年記念ホールにて、山極総長が「グローバルリーダーの条件をゴリラから学ぶ」と題して講演会を行った。ゴリラ社会には「リーダーの条件」があるとして、豊富なフィールドワークを通して気づいたリーダーの姿から、今、人間社会に求められているグローバルリーダー像について意見を展開した。

続いて、徳賀芳弘 副学長事務代理から、京都大学の近況報告を交えながら、京都大学基金の活動について報告があった。

その後、場所を2階の国際交流ホールに移して行われた懇親会では、山極総長および本学の全理事が参加者を迎え、和やかに歓談した。寄附者からは、「ゴリラ研究で有名な山極総長の講演に興味があったので、今日は聞けてよかった」、「京都大学が多くの優



歓談する参加者と山極総長

秀な人材を輩出するのを期待している」、「ほかにはない京大らしい研究成果を上げてほしい」といった声が多く聞かれ、感謝の集いに満足いただくと同時

に、京都大学基金にご理解いただけた。

(総務部(渉外課))

京都市と国際学術都市としての魅力向上に関する連携協定を締結

本学は、国際学会の誘致や人材育成の分野等において、京都市と更なる連携を図るとともに、各種取り組みの拡充を図るため、相互に連携・協力を行う協定を締結した。本協定では、次に掲げる事項について、連携・協力を図る。

1. 国際学会・国際会議の誘致および開催促進に関すること
2. 海外での留学生誘致の連携プロモーションに関すること
3. 観光分野の人材育成に関すること
4. 卒業生の京都観光支援に関すること

8月6日(木)に行われた調印式には、山極壽一総長と門川大作 京都市長が出席し、協定書に署名した。

これからの具体的な取り組みについては、本学と京都市とで相談・検討のうえ、決定する予定であるが、今回の協定締結を契機に、WINDOW構想に沿って、自然に学び、京都の文化的・歴史的遺産と



署名した協定書を手に握手を交わす門川市長(左)と山極総長(右)

触れる機会を増やしながら、高い品格や高潔な態度を身に付けられるよう、魅力あるカリキュラムや快適な環境および制度の構築をしていくとともに、国際学会の誘致強化、様々な国からの留学生や外国人教員・研究者のさらなる受け入れ、国際的な多様性と活力を高め、本学の国際化を推進する。

(総務部(渉外課))

第2回京都大学－稲盛財団合同京都賞シンポジウムを開催

百周年時計台記念館において7月11日(土)・12日(日)に、第2回「京都大学－稲盛財団合同京都賞シンポジウム」(KUIP: Kyoto University-Inamori Foundation Joint Kyoto Prize Symposium)を開催した。

今回は、一般市民、学生、研究者など2日間合わせて約650名の参加者のもと、「テクノロジー・遺伝子・芸術－進化の足跡を辿り、現代文明とその未来を考える－」を統一テーマに、研究者も満足できる内容を一般の方々にも興味深く聴講いただけるよ

う工夫された内容で語られた。

ハリーA.アトウォーター 米国カリフォルニア工科大学教授やスバンテ ペーボ ドイツ マックス・プランク進化人類学研究所教授など世界トップクラスの研究者や作曲家12名が講師として登壇、演奏家によるデモンストレーションなども行われた。クロージング・セッションでは、「シンポジウムの総括と将来展望－統一テーマの視点から－」と題して、各分野を代表する登壇者と本シンポジウムの企画を

行った本学教員に加えて、山極壽一 総長が進行役として登壇した。

聴講者からは、「このシンポジウムについて今まで知らず、もったいないことをしました」、「非常に

詳しい内容の話を一般人が理解できるよう説明されていたことに感謝します」、「生物科学のセッションは山極総長の質問と登壇者の応答がエキサイティングだった」といった感想が寄せられた。



出席者全員の集合写真

(総務部(総長室))

「京都大学オープンキャンパス2015」を開催

本学は京都大学オープンキャンパスを、「君が引き継ぐ知と夢、そして未来」と題したメインテーマの下、8月6日(木)から8日(土)までの3日間開催した。猛暑の中、今年度も多くの中高生、保護者らの参加があった。

百周年時計台記念館1階百周年記念ホールでは、駒込 武 オープンキャンパス委員会委員長(教育学研究科教授)による司会のもとオープニングセレモ



講演する山極総長

ニーを行った。6日・7日は山極壽一総長、8日は伊藤紳三郎工学研究科長

による「京都大学を目指す皆さんへ」と題する講演があり、参加

者は皆、熱心に耳を傾けていた。続く京都大学応援団による演舞では、力強い演舞・演奏とユーモアも交えたエールが送られ、会場内は大いに盛り上がった。その後、「在学生からのメッセージ」では、法学部と工学研究科の先輩が自らの受験体験や大学生活について参加者に語りかけた。



京都大学応援団の演舞

また、6日には総合人間学部・文学部・医学部医学科・医学部人間健康科学科・薬学部、7日には教育学部・法学部・経済学部・理学部・農学部、8日には工学部がそれぞれ学部説明会を行い、学部長による歓迎挨拶の後、学部の紹介や模擬授業、体験学習、研究室訪問など各学部の様々な企画に参加者の満足した様子が見られた。



在学生相談コーナーの様子

キャンパスツアー、在学生交流コーナー、相談・資料コーナー、京大教員による講演会、在学生によるサークル紹介などの企画や、附属図書館、総合博

物館、百周年時計台記念館歴史展示室の見学も盛況で、3日間ともキャンパス内が多くの参加者で賑わった。

受験生の志望校選びにオープンキャンパスはますます重要なものになっている。今回のオープンキャンパスへの参加を通して、本学の雰囲気や魅力を十分に感じていただき、入学への意欲を一層高められたことと期待している。



正門周辺の様子

(教育推進・学生支援部(入試企画課))

部局の動き

研究連携基盤の銘板を上掲

研究連携基盤では7月28日(火)、銘板上掲式を挙行了した。

湊 長博 研究担当理事・副学長、大志万直人 研究連携基盤長、水内 亨 同副基盤長、森澤眞輔 iPS細胞研究所副所長によって銘板が上掲された。

研究連携基盤は、広範かつ多様な専門分野を擁する本学の研究所・センター群の組織間の連携を強化し、異分野融合による新分野の創生等、未踏科学への取組みを推進するとともに、学部・研究科を含めた本学のさらなる機能強化に向けた研究力強化、グローバル化やイノベーション機能の強化に取り組むため、その基幹的な役割を担い研究所等の連携の基盤

となる組織で、本年4月1日本学の学内組織として設置された。



左から水内副基盤長、大志万基盤長、湊理事・副学長、森澤副所長

(研究連携基盤)

寸言

「学問の自由」「大学の自治」の橋頭堡

上野 千鶴子

世界でもっとも民主的と言われるワイマール憲法のもとでナチスの独裁政権が成立し、それが崩壊したあと、戦後になって「なぜナチスを阻止できなかったのか」と問われたマルチン・ニーメラー牧師が、痛恨の思いで残した告白がある。有名な文章なので、ご存知の方も多だろう。少し長いが引用しよう。



清水梅子撮影

「ナチスが共産主義者を攻撃したとき、自分はすこし不安であったが、とにかく自分は共産主義者でなかった。だからなにも行動に出なかった。次にナチスは社会主義者を攻撃した。自分はさらに不安を感じたが、社会主義者でなかったから何も行動に出なかった。

それからナチスは学校、新聞、ユダヤ人等をどんどん攻撃し、自分はそのたびにいつも不安を感じたが、それでもなお行動に出ることはなかった。それからナチスは教会を攻撃した。自分は牧師であった。だから立って行動にでたが、そのときはすでにおそかった。」

ナチスにならって「騒がず静かに憲法改正をすめればよい」と言ったのは、安倍政権の副総理、麻生太郎だ。そのとおり、最初は憲法改正のハードルを下げようと96条改憲を言いだし、それが「裏口入学」と批判されると、閣議決定による解釈改憲に踏みきった。国会で審議中の違憲安保関連法案を成立させたら次は、9条改憲国民投票にのりだすだろう。そのための準備に、第一次安倍政権で国民投票法を成立させ、最近になって18歳投票権を確立した。

自民党憲法改正草案を見ると、「9章 緊急事態」

という項目があって、「自然災害、武力攻撃、内乱」などの「緊急事態」には、法律と同じ効力を持つ法令を内閣が自由に発令できる、とある。これでは内閣への全権委任状に等しい。「9条問題」というより、独裁政権を許す「9章問題」のほうが深刻だろう。

安倍政権の攻撃は、いまや「学校、新聞、在日外国人」へと向けられている。ニーメラー師の回顧によれば、最終段階1歩前。新聞やTVなどメディアへの規制や介入も露骨だし、「皆様のNHK」が「アベさまのNHK」となりさがった。学校への攻撃はいよいよ高等教育へ及んだ。学校行事に日の丸君が代を求める指導が文科省から大学へと出され、したがわないう大学は交付金でペナルティを受けるだろう。あまつさえ人文系の学部学科の統廃合を求めるという。大学を職業訓練校にしたいのか、根源的にものを考える訓練も人材もいらないと見える。研究者はすでに外部資金獲得競争に追いこまれている。軍事目的の研究助成に誘導される者も出てくるだろう。次のステップは目に見えている。18歳投票権の確立と共に「国民」教育を実施し、道徳教育もメニューに上がっている。次は教育委員会の廃止だ。そうなれば教科書の採択はほぼ自治体首長の専権事項となるだろう。それ以前に「国民」教育のための地ならしは、これも第一次安倍政権の時に成立した教育基本法改正でできている。

京都大学は、こうした「高等教育の危機」にどう対処するのだろうか？

文科省の膝下にある東京大学とちがって、京都大学は久しく反権力・反権威の旗印を掲げてきた。だからこそわたしも、その卒業生であることを誇りに思ってきた。京都大学は、あまたある地方大学のひとつではない。「学問の自由」「大学の自治」の橋頭堡だ。固唾を吞んで見守っていたい。

(うえの ちづこ 東京大学名誉教授、昭和47年文学部卒業、昭和52年大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学)

随想

科学研究基盤成立の歴史を
振り返って、今考えること

名誉教授 本田 孔士

Scienceの体系が出来上がったのは19世紀になってからである。日本では、数学、天文学、物理、化学、生物学などを集合する学として、複数の意味を込めて、Scienceは「科」学と訳された。それ以前の真理探究者はパトロンへの支援あるいは自分の財産で研究を行っていたのであって、教育者としての職はあっても、研究者として他から組織的な支援を得る体制は存在しなかった。20世紀に入り、特に第2次世界大戦以降、「国」が産業発展の目的で科学研究支援を行うようになった。さらに少し前を見れば、ドイツのTechnische Hochschule (TH)、やアメリカのAgricultural & Mechanical (A&M) Collegeに産業興国の原型を見る。国あるいは州が研究支援を行うからには納税者への説明義務が生じ、国の研究支援の方針が科学の方向性、産業、教育、雇用など、さらには社会構造にまで影響を及ぼすようになった。日本では、1886年東京帝大、10年後の1897年京都帝大にUniversityとして始めから「工学部」を内部に設置し、逆に「神学」を省いた。現在、世界的にScienceとTechnologyの融合が進んでいるが、日本は明治時代にそれを先取りしている。欧州では技術への偏見があったのか、伝統的大学のTechnology部門を持っていない。19世紀のJohn Hopkins大学の出現等を切掛けとして、旧来の大学に危機感が生まれ一部の機構改革が行われたものの、大学の真髄は真理の追究にあり、実用が目的では無いとする姿勢は揺るがなかった。大学は極めて自己完結的で内部閉鎖的集団であった。「新しいことを知れば、新しい認識が生まれる。これまでの固定概念を根底から覆し新しい解釈が生まれる。新しいものの見かたは、人々に新鮮な驚きをあたえ、それは、人々の世界観、人間観、自然観をも変える。さらに全く新しい技術を生み出す事もある。それが、大学の社会的使命である」という立場である。一方、ある現象の「真理を知る喜び」は人間に固有のものであって、その意味で、Scienceは「音楽や美術」と共通する。人間は心豊かに知的に生きたい。それを充実した人生と言う



のであろう。

Science, Technologyの社会化は、Franklin Roosevelt (1882-1945) 米国大統領が1945年に提唱した「Science, the Endless Frontier」(Vannevar Bush (1890-1974) 報告書による) が切掛けとなって加速し、研究費も加速的に増えて行った。科学は豊かな生活、雇用の創出、健康増進の為に、戦時(この報告書は原子爆弾開発に結びついた)のみならず、平和時にも活用される事になったのである。今では当たり前になったIn-house Laboratory [企業内研究所]が出来たのも20世紀に入ってからであり、19世紀の産業はScienceと無縁に歩んでいる(例えばThomas Edison (1847-1931)は数々の発明をしたが、それらは全てScienceと何ら関係が無い)。企業内研究所の成功例として、1935年、Carothers(Harvard大出身)によるDu Pont社のNylon開発とその工業化があるが、それ以前にさしたる成功例は見当たらない。「Technologyの一般化」(技術の閉鎖性からの開放)は、技術が学校、教育機関に委ねられる事に繋がった。希望するなら誰にでもScienceに係わり、Technologyを習得、利用出来るチャンスが与えられた。結果として職業選択の自由が生まれ、社会の階層構造にまで変化を与えた。

私が携わってきた医学の世界は、その間、常に帰納学的 Applied Scienceの末席にあった。本来、医学には、博物学、経験学的な側面が強い。純粋科学になっていない部分が多い。例えば手術は未だにかなり経験則によっているし、医学では実験を繰り返して、平均値でものを言う。医学、生命科学は未だに不確実性、種差、個体差の問題から抜け出せないでいる。しかしF. Rooseveltが強く支援を表明した実学の一つであり続けてきた。だが今、人の欲望に限りが見えなくなっている。「止むを得ないとあきらめる」謙虚さが失われつつある。そんな時勢に振り回されて大学まで益々実利に偏って良いはずがない。現象の全体像から見れば極僅かな実学の新知見に浮かれて、人間はいつの間にか真理の理解に不遜になっていないだろうか。大学設立の原点に立ち戻り真理探究こそ大学の終局の使命である事を大学人自身が再認識する時ではないだろうか。自然界の多様性保護、地球温暖化防止等々、持続可能な世界を我々は目指している。そこで行われるScienceは常にinnovativeで、かつsustainableなものでなければならない。

(ほんだ よしひと 平成15年退職、元医学研究科教授、専門は視覚病態学(眼科学))

洛書

生物学の研究材料

小山 時隆

ウキクサという植物をご存知だろうか。池や水田に浮いている平らで小さな植物だ。私はこの植物を材料に生物時計の基礎的な研究を進めている。このコラムでは生物学で使われる研究材料の話をしてみたい。



生物学といっても多種多様な分野があり、それぞれが日進月歩で発展しているため、専門外の研究を聞かされても私は理解できないことが多い。しかし、研究材料が分かると何となく安心できる。例えば、ヒトを対象に研究していると聞けば、病気や健康に関わる研究、その基礎になる研究をしているのかなと想像できるし、イネを使った研究であれば収量増加や良い食味につながる研究をしていると期待してしまう。医学や農学に関わる生物学の分野では、研究材料と研究目的、さらには人類社会への貢献具合まで具体的にイメージしやすい。一方、私が扱っているウキクサを持ち出して、『今、このウキクサの生物時計は午後5時をさしています』と人々に唱えたところで、その意図は理解されず変な人扱いされるのがオチだろう。

人類社会に直接貢献している材料を使えば人の役に立つ研究になるかといえ、そう単純なものでもない。ヒトはともかく、農業的・産業的に利用されている生物を研究に使うからといって、それが生産性や商品価値の向上につながる研究になるわけではない。酵母という生き物がいる。私たちが嗜むアルコールはその発酵作用で作られ、その人間社会に及ぼす影響は古代から絶大だ。一方で、私のような植物の生物時計研究者も酵母を使うことがあるくらい、基礎生物学の分野で酵母はよく使われている。酒好きで美味しいお酒造りに貢献したいわけではなく、ただ単に自分の研究遂行のための道具として扱いやすいからだ。酵母の発酵に関わる反応経路など全く気にしていない。現代の生物学では、発酵作用とい

う人類が活用してきた元々の特性から解放され、酵母は生物学の幅広い研究目的のために利用できる価値をそなえてきたといえる。

それでは、どのような生物が研究者の支持を集めるのだろうか。『安近短』という言葉は旅行業界の用語だが、生物学の研究材料でもこの特性は重宝される。研究サイド的には、安いコスト、身近なもの、世代時間が短い、といったところだ。また、安と短は必然的にサイズの小ささを伴う。先ほどの酵母は安近短であり、研究材料としてうってつけだ。しかし、残念なことに酵母には私が注目している一日を刻む生物時計がない。安近短な旅行先にすべてを求めるのは少し無理があるのと同じだ。私たちにとって安近短な京都の街は観光地として世界一の魅力をもつが、大自然を感じるのにふさわしい場ではない。私たちの好奇心が京都だけでは収まらないのと同様に、多様な興味の対象となる生物の真相(深層)に迫るには、様々な材料を用いた研究が必要だろう。また、旅行はお金がかかるだけで直接的な利益を生まないものの、人の想像力、創造力をかき立て、長い目で見ると大きな利益につながることもある。基礎研究は旅行のようなもので、その成果は旅行記といったところだろうか。研究材料が何であれ、人々の知的好奇心をかき立てられる成果が求められる。一方、昨今の生物学は安近短な材料を使っても研究にはお金がかかってしまうため、社会への直接的な貢献が求められている。

最後にウキクサを宣伝したい。本学の水田圃場にも勝手にはえてくるウキクサは安近短を具現化したような植物だ。植物生理学的研究の歴史は長いのだが、この30年は人気が高い材料ではなかった。しかし、水質浄化やバイオ燃料用作物として有望な植物として近年注目されるようになった。このタイミングで本学SPIRITSプログラムに関連課題が採択され、さらに、この7月に本学で国際ウキクサ会議を開催した。道のりは長い、社会貢献できる新たな研究材料としてのウキクサを世界に広げる第一歩が京都から踏み出された。

(おやま ときたか 理学研究科准教授 専門は時間生物学)

話題

第19回リカレント教育講座「『心の教育』を考える—いじめへの対応と心のケア—」を開催

教育学研究科附属臨床教育実践研究センターは、第19回リカレント教育講座「いじめへの対応と心のケア」を8月2日(日)に百周年時計台記念館国際交流ホールにおいて開催し、95名が受講した。本講座は年1回、教育相談活動に携わる専門家(幼・小・中・高校教諭、養護教諭、心理臨床専門家等)を対象に、研修活動の一環として開催しているもので、不登校、非行、いじめ、発達障害など、現在の教育現場で大きな問題となっている現象を通じて、子どもの心や教育について深く考えることをねらいとしており、毎年、全国から熱心な教師や臨床心理士等専門家の参加を得ている。

午前中は、これまでいじめの問題に対して様々な形で関わって来られた経験をお持ちの3名の先生方をシンポジストに迎えてシンポジウムを行い、午後からは分科会に分かれて事例研究を行った。

シンポジウムでは、3名のシンポジストにそれぞれ、いじめという現象への理解とその対応や、予防

教育について、第三者委員会の活動を通して見えてきたものなど、幅広い視点から「いじめへの対応と心のケア」についてお話しいただいた。事例研究では、いじめや不登校等の問題を抱えた個別事例を中心として受講生と講師が活発に意見を交わした。参加者からは、「なかなか他の方のケースに触れる機会が少ない中、実際の事例を通して見ていくことで刺激を受け、勉強になった」、「ケースの見立てとともに、学校で何ができるか、考えることができました」などの感想が寄せられ、大変好評であった。本講座は来年度以降も引き続き開催していく予定である。



シンポジウムの様子

(大学院教育学研究科)

吉村瑤子さんがロレアル・ユネスコ女性科学者日本奨励賞を受賞

吉村瑤子 理学研究科博士後期課程学生が物質科学分野にてロレアル・ユネスコ女性科学者日本奨励賞を受賞し、7月8日(水)に開催された第10回ロレアル・ユネスコ女性科学者日本奨励賞の授賞式に出席した。

この賞は、日本の若手女性科学者が研究活動を継続できるよう奨励することを目的とし、物質科学、生命科学の分野で、博士後期課程に在籍または、博士後期課程に進学予定の女性科学者を対象としている。

受賞となった研究内容は磁石に関する研究であ

る。磁石はパソコンなどの情報機器に使用されているハードディスクドライブの記録装置として用いられてきた。吉村さんは磁石の向きが電流によってどのように変わるかを詳しく研究し、低消費電力で高速動作する全く新しい情報記録装置の実用化に向けて貢献したとし、同賞を受賞した。

また、本学関係者として山本久美子 東京大学薬学系研究科博士後期課程学生(本学理学部卒業)も同分野で受賞した。なお、授賞式はフランス大使公邸で開催され、稲葉カヨ 理事・副学長が挨拶を述べた。



受賞者(左から3人目が吉村さん、4人目が山本さん)
写真: 日本ロレアル提供



左から吉村さん、稲葉理事・副学長、山本さん

(大学院理学研究科)

日本学術振興会研究拠点形成事業「インドシナ地域における地球環境学連携拠点の形成」第3回国際シンポジウムを開催

ベトナムのダナン大学にて、7月27日(月)、日本学術振興会研究拠点形成事業「インドシナ地域における地球環境学連携拠点の形成」第3回国際シンポジウムを本学地球環境学堂、ダナン大学およびダナン工科大学との共催で開催した。

本プログラムは、近年急激な変容を遂げるインドシナ地域の環境問題解決のため、学際的・国際的協働体制を確立することを目的として、地球環境学堂・学舎が平成25年度から3年間実施してきた。

今回のシンポジウムでは、本学や拠点大学の教員、学生の他、本プログラムに関心を持つベトナム国内やアジア地域の大学関係者、日本の他大学関係者や企業関係者、在ベトナム日本大使館などを含め、合計134名が参加した。

シンポジウムでは、まず藤井滋穂 地球環境学堂長による開会の辞の後、今回の主催である本学、ダナン大学およびダナン工科大学を代表してTran Van Nam ダナン大学長から挨拶があった。その後、本拠点事業の進捗状況説明に続き、教育・研究・実践の国際連携に関する講演をダナン大学、在ベトナム日本大使館、本学ASEANセンター代表者がそれぞれ行った。本プログラムでは、シーズ研究助成としてベトナムの研究者への助成を行っており、その成果に対する証書授与式および研究成果の口頭・ポ

スター発表が行われた。また、ベトナムへ進出している日系企業の取り組みや製品紹介を中心としたセッションも行われ、産業界も含め、活発な議論が行われた。

併せて、本プログラムのミニワークショップがベトナムの上位の大学と嘉南薬理大学(ERM-CNU台湾)を含むConsortium for Green Technology Management and Research(CGTM)により毎年開催されている環境工学系の研究発表会であるInternational Forum on Green Technology and Management 2015(IFGTM 2015)の中で開催された。

本プログラムでは、今後も成果を活かした関係機関との新たな連携発展をしていく予定である。



ポスタープレゼンテーションの様子

(大学院地球環境学堂・学舎)

生存圏研究所のMUレーダーがIEEEマイルストーンに認定

MUレーダー^{*1}は、昭和59年に滋賀県甲賀郡信楽町(現甲賀市信楽町)に設置されたアジア域最大級の大気観測用大型レーダーである。MUレーダーは、アクティブ・フェーズドアレイシステムを用いた世界初の大規模大気レーダーとして、大気科学やレーダー技術の発展に貢献したことが評価され、IEEE^{*2}マイルストーンに認定された。IEEEマイルストーンは電気・電子・情報・通信分野において達成された画期的なイノベーションの中で、開発から少なくとも25年以上経過し、地域社会や産業の発展に多大な貢献をしたと認定される歴史的業績を表彰する制度として昭和58年に創設された。国内からは、八木・

宇田アンテナ、東海道新幹線などが認定されており、本学からは初の栄誉である。



銘板の贈呈(右からMichel会長、山極総長、柵山社長)

5月13日(水)、芝蘭会館において記念式典が開催された。約120名の方々の列席のもと行われた贈呈式において、Howard E. Michel IEEE本部会長から山極壽一 京都大学総長と柵山正樹 三菱電機株式会社執行役社長に銘板が贈呈された。続いて、記念祝賀会において常盤 豊 文部科学省研究振興局長(牛尾則文 同局学術機関課長代読)、久間和生 内閣府総合科学技術・イノベーション会議議員らから祝辞

が述べられた。引き続き開催された記念講演会では、MUレーダー観測成果の概要等が講演された。その後、信楽MU観測所に移動し、約80名が見守る中、IEEEマイルストーン銘板の除幕式が執り行われた。

※1: Middle and Upper Atmosphere Radar (中層超高層大気観測用大型レーダー)

※2: The Institute of Electrical and Electronics Engineers



MUレーダーIEEEマイルストーン受賞記念式典参加者集合写真

(生存圏研究所)

大学生研究フォーラム2015を開催

7月24日(金)、百周年時計台記念館において、高等教育研究開発推進センターおよび電通育英会、東京大学大学総合教育研究センターとの共催により、「大学生研究フォーラム2015」を開催した。

「大学教育に必要なのは「プロジェクト」か「プロジェクト学習」か」というテーマのもと開催された本フォーラムは、溝上慎一 京都大学高等教育研究開発推進センター教授の趣旨説明に続き、美馬のゆり 公立はこだて未来大学教授の基調講演の後、飯吉 透 京都大学高等教育研究開発推進センター長、吉見俊哉 東京大学大学総合教育研究センター長、森 隆一 電通育英会理事長よりご挨拶をいただいた。二つの会場で開催された午後のセッションでは、村上正行 京都外国語大学マルチメディア教育研究センター教授と中原 淳 東京大学大学総合教育研究センター准教授がファシリテーターを務め、大学生の学びと成長のため、さまざまな角度から問題提起と討議が行われた。

フォーラムの最後には溝上教授が統括講演を行

い、8年間にわたる取り組みの展開と今後の課題を紹介した。

この大学生研究フォーラムには、大学関係者、企業内人事教育関係者、大学生・大学院生、高校教員等、学内外から計306名の参加者があり、多くの参加者が活発に意見交換を行うなど、盛会のうちに終了した。



ディスカッション

(高等教育研究開発推進センター)

人間の安全保障開発連携教育ユニットがサマースクール「2015年京都研修プログラム」を実施

大学の世界展開力強化事業「人間の安全保障」開発を目指した日アセアン双方向人材育成プログラムの構築によるサマースクール「2015年京都研修プログラム」を実施し、タイのバンコクにあるカセサート大学の学部学生13名と教員2名を受け入れた。本プログラムは、国際交流推進機構との連携により農学部が実施している国際交流科目「変容する東南アジア—環境・生業・社会」(8月31日～9月12日)に係る受入プログラムである。

研修は、5月26日から6月5日までの11日間、実施した。参加学生は、秋津元輝 農学研究科教授による講義「Agri-food World in Japan: Present and future」を聴講し、縄田栄治 同教授、神崎護 同教授、白岩立彦 同教授、間藤徹 同教授、飛奈裕美 人間の安全保障開発連携教育ユニット特定講師の引率により、農学研究科実験圃場、同附属高槻農場、藤田林業、かやぶきの里、滋賀県彦根市稲作農家、無施肥無農薬栽培調査研究会(NPO)、招徳酒造、京都市内の



農学研究科実験圃場見学

有機栽培農家とトマト農家、賀茂ナス農家、サントリー京都ビール工場を訪問して、日本の農林業と環境について学び、琵琶湖博物館では、琵琶湖と周辺地域の生態系および自然保護活動について学んだ。

さらに、参加学生は、湯川志貴子 国際交流センター准教授による講義「京都の文化」を聴講したうえで、友禅染と着物着付けを体験し、金閣寺、清水寺、錦市場を訪問して、日本文化を体験した。



清水寺訪問

学生は四つのグループに分かれてディスカッションを行い、最終日の発表会で、研修を通して学んだことを発表した。

この研修には、分野を問わず、過去にカセサート大学を訪問した、または今後の研修(派遣)に参加予定の本学学部学生も多く参加し、タイの学生と交流を深めた。

(学際融合教育研究推進センター)

平成27年度総長杯(卓球大会)を開催

7月10日(金)総合体育館(地下1階卓球場)において、平成27年度総長杯(卓球大会)が行われた。13チーム97名のエントリーがあり、各チーム優勝を目指し終始熱戦を展開した。当日はかなりの蒸し暑さであったが、その暑さよりも熱い応援で盛り上がり、激しいラリーの応酬と熱戦が繰り広げられた。決勝戦は、吉田南共通事務部の「BELL CAMPUS II」(代表者:菅原佐知子)チームが、北部構内事務部「チームNORTH」(代表者:中村一也)チームを2対1で下し、見事に優勝した。試合終了後の表彰式では、山崎宏記 総務部人事課福利厚生室長より優勝、準

優勝チームに賞品が授与された。



優勝した
「BELL CAMPUS II」チーム



準優勝した
「チームNORTH」チーム

(総務部(人事課))

琵琶湖周航の歌開示の日記念講演会を開催

6月28日(日)、京都大学ボート部OBである佐藤茂雄氏(京阪電気鉄道(株)最高顧問、大阪商工会議所会頭)が、滋賀県高浜市の今津東コミュニティセンターホールで「琵琶湖周航の歌開示の日」(主催：琵琶湖周航の歌を伝承する会)を記念して講演を行った。大正6年6月、第三高等学校漕艇部員の小口太郎が周航2日目の今津の宿で、仲間に歌詞を披露したのがきっかけとなり誕生した「琵琶湖周航の歌」は三高漕艇部の愛唱歌、寮歌として誕生してから今年で98年目を迎える。当日、約110人の聴講者を前に、「琵琶湖周航の歌とフィックス艇」と題し、学生時代にフィックス艇で行った琵琶湖周航の思い出にはじまり、フィックス艇が周航になくてはならない存在であることに触れ、今津町と縁を結ぶきっかけとなった平成5年のフィックス艇建造復元の中心人物として当時のエピソードを披露。講演中、「琵琶湖周航の歌」研究家としても、「琵琶湖周航の歌」の文

化を継承する活動こそが地域創生に繋がる意義ある事例だとして主催者にエールを送り盛会のうちに終了した。平成5年当時復元され、歌の作詞者と作曲者吉田千秋にちなみ「千秋・太郎」と命名、奥田 東元総長により揮毫されたフィックス艇が、今も今津町でその文化の継承に一役買っている。



講演する佐藤氏
(教育推進・学生支援部(厚生課))

北部構内で「子ども見学デー」を開催

7月29日(水)、北部構内で「子ども見学デー2015」を開催した。

「子ども見学デー」は、子どもたちが親の職場を見学し、親子のふれあいを深める機会とするもので、ワークライフバランスを推進する北部キャンパス独自の取り組みで、開催は今年で2回目となる。昨年は北部構内で勤務する職員の小学生の子どもたちを対象にしていたが、今年は北部構内で勤務する全教職員を対象を拡大し、小学生の妹弟の未就学児を含めた4歳から12歳までの18名が参加した。

今年のテーマは「京都大学を調査せよ!」で、子どもたちが研究者となり、北部構内を調査して研究報告書を完成させるものとし、数理解析研究所、湯川記念館、北白川試験地、馬術部厩舎、天体望遠鏡、地球惑星科学専攻図書室の6か所を巡った。



湯川記念館で職員の説明を聞く子どもたち

北白川試験地では大

橋 健太 技術職員による樹木や植物の解説、大学院生による日本ミツバチの説明や蜂蜜の試紙を行い、天体望遠鏡



北白川試験地で学生の説明を聞く子どもたち

では太田耕司 教授による望遠鏡やドームの解説を受けたほか、馬術部厩舎では学生部員による馬に触れる体験をし、これらを通して研究報告書を完成させた。

当日は気温の高い日だったが、子どもたちは大きい馬や巨大な天体望遠鏡に好奇心いっぱいの様子だった。全員が無事に研究報告書を完成させ、中村一也 北部構内事務部長から修了証が手渡された。達成感に満ちた子どもたちの笑顔を中心に保護者の教職員、スタッフと記念撮影をして幕を閉じた。親の職場について認識が深まる良い機会となった。

(北部構内事務部)

訃報

このたび、SANGA NGOIE Kazadi 教授、清水剛夫名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に各氏の略歴、業績等を紹介します。

SANGA NGOIE, Kazadi 教授



サンガ・ンゴイ・カザディ先生は、6月28日逝去された。享年63。

先生は、昭和54年10月ザイル共和国キンシャサ大学大学院理学研究科修士課程を修了された後、昭和58年4月から京都大学に留学され、平成元年3月に理学研究科博士後期課程を修了、学位を取得された。平成2年10月に創価大学比較文化研究所アフリカ研究センター専任講師、平成5年4月に三重大学教育学部助教授、平成7年4月に同教授、平成19年4月に立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部・研究科教授を経て、平成26年4月に京都大学生存圏研究所教授に就任された。平成26年11月からは同国際高等教育院副教育院長を併任された。

先生は、特に植生と密接に関連した気候・環境動

態解明に関する優れた研究業績を挙げられた。なかでも人工衛星からのリモートセンシングデータと地理情報システム(GIS)を有効に用い、地球システムにおけるエネルギーや物質循環を統合的に解析した一連の研究は高く評価されている。立命館アジア太平洋大学在任中には国際部副学長として、開発経済、国際行政、環境管理などの分野でアジア太平洋地域の持続可能な発展に貢献できる高い専門性を有した人材の育成を目的としたプログラムを推進され、本学においてもその国際的な手腕を発揮されることが期待されていた。

また先生は、アフリカの真の自立・発展を生涯のテーマとしてNGOアフリカ村おこし運動およびアフリカ開発研究センターを創設され、現地小中高等学校、農業専門家育成研修学校等の建設・運営に精力を傾注された。

(生存圏研究所)

清水 剛夫 名誉教授



清水剛夫先生は、7月8日逝去された。享年82。

先生は、昭和30年3月京都大学工学部燃料化学科を卒業、同32年3月同大学大学院工学研究科修士課程を修了し、同年4月に同大学工学部助手に採用され、同36年9月工学博士の学位を授与された。昭和38年11月同講師、同43年4月同助教授を経て同63年1月同教授に就任、分子エネルギー工学講座を担当された。平成8年に停年退官され、京都大学名誉教授の称号を授与された。

本学退官後は、特に要請されて、平成8年4月に株式会社関西新技術研究所(同15年7月に株式会社KRIと社名変更)の特別顧問に就任、同9年6月

に同社取締役副社長に就任、同15年6月に取締役副社長を退任、同15年7月から26年6月まで同社特別顧問を務められた。

先生はオレフィンの重合、遺伝子関連化合物化学、高分子触媒を中心とする機能性高分子、選択的能動輸送を中心とする人工機能膜、光機能分子システム材料、分子素子を目指した分子機能材料など、幅広い分野にわたる研究において優れた研究業績を残され、その発展に寄与されるとともに、分子エネルギー工学分野において多大の貢献をされた。

また、日本膜学会において、副会長、会長の要職を歴任された。これら一連の教育研究活動、学界活動により、平成8年11月紫綬褒章、同20年4月瑞宝中綬章を受けられた。

(大学院工学研究科)